

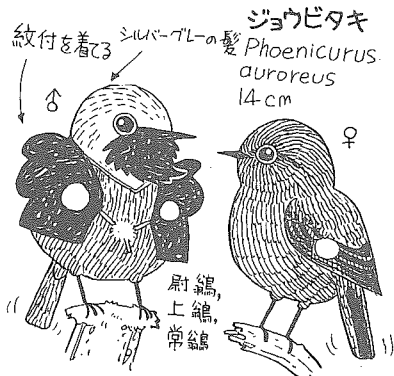
地鳴き雑記

小林みどり (神奈川県大和市)

鳥の地鳴きは、あまり注目されることがない。さえずりのように、思わず聞き惚れるメロディがあるわけでも、一度聞いたら忘れられない強烈な個性があるわけでもない。単なる小さな音にすぎない。しかし、さえずりの期間に限られているのに対し、地鳴きは1年中。鳥にとっては重要な情報交換の手段になっているはずだ。鳥をよく知るためには、もっと注目されてもいい。それに地鳴きに耳を傾けるのも、結構いいものである。鳥を求めて先へ先へと進みたがる足をとめ、ひと呼吸して、耳をすます。自分の足音が消えただけでも、周囲は静けさを増し、だんだん小さなつぶやきが聞こえてくる。なにか、気持ちも和んでくる。いわば“癒し系自然観察”。気がつくと、小声でおしゃべりを交わしながら、鳥たちがすぐ近くまで来ていたりする。

晩秋のある朝。寒い～眠い～起きたくない～と布団の中でグスグスしているところへ聞こえてくる、あの声。冷たい空気に染み透る、少し哀愁を帯びたヒッヒッヒッ…気がつけば、いつのまにか布団を飛び出し窓を開けて、双眼鏡をつかんで近所中のアンテナを探し回っている。私にとっては、どんな目覚ましよりも効果的なジョウビタキの地鳴きである。

同じ頃、高い山から平地に降りてくるルリビタキも似たような声を出す。両者のヒッヒッヒッ…は、どう違うか? 【野鳥識別ハン



(富士鷹なすび)

ドブック (初版)』(高野伸二・著)にはヒッヒッの間隔がルリビタキのほうが短い、と書いてあるが、そう言われればそんな気もする。ジョウビタキのヒッヒッのほうが、何となく歯切れがいいという人もいるが、そう言われればそんな気もする。要するに微妙なのである。聞き分けがむずかしいヒッヒッのほかにも、ジョウビタキはカッカッ、とかカタカタといった乾いた感じの声も出す。一方、ルリビタキはグググッ、ギョギョと濁った声。この声が聞こえれば、かなり確実に識別できる。

そもそも両者は、生息環境が違う。ジョウビタキは畑、林縁など明るく開けたところ、ルリビタキは森の中の溪流沿いなど薄暗いところ。と、決め付けていたら…この冬はやたらにルリビタキが多く、いろんなところにルリビタキがいる。先日は市街地の小さな公園の広場で、ルリビタキ (♂若鳥) とジョウビタキ (♂) が同じ木にとまっているのを見た。地鳴きを聞き比べるチャンス! と待ち構えていたら、ルリビタキの奴、地鳴きどころか気持ち良さそうにさえずり始める。ジョウビタキはむつつり黙り込んだまま、そのうちプイッと退場…世の中、思うようにいかないものだ。

ツグミのクィクィ、クワクワという地鳴きは、よく晴れた冬の朝によく似合う。冬の冷気が、そのまま音になったような声である。冷えきった大気を引き裂いて、あの声がひびいてくると、まるで号令をかけられたように、ぴりっと気持ちが引き締まる。それだけ緊張感のある、鋭い声である。

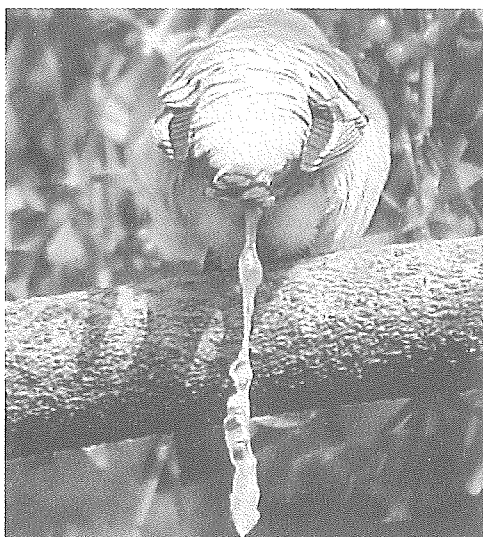
この声といい、いつも胸を張ったあの姿勢といい、一分のスキもない鳥かと思うと、そうでもない。何かに驚いて急に飛び立つときは、何とも滑稽な声を出す。クワッキャキャ? オッキョッキョ? 字ではうまく表せないが、聞いているほうが驚くような素っ頓狂な声である。この声とともに、じたと飛び立つ。飛び立った先の枝で、まだ興

奮さめやらずクワクワとかキョキョとか奇声を発しながらも、姿勢だけは例の偉そうなポーズ。この慌てぶりと、いつもの緊張感あふれる姿の落差が大きくて、なんともおかしい。

冬の権化のようなクィクィ、クワクワという声は、季節が進むにつれて変わってくるように思う。空気を切り裂くような鋭さが影をひそめ、どこことなく柔らかみを帯びてくるのである。艶っぽくなっていく、と言ってもよい。3月末のある日、聞きなれない美声にふと足をとめる。さえずりというには拙く、1フレーズ歌っては一息いれ、また1フレーズ歌う。その合間に時折、すっかり艶っぽくなったクィクィ、クワクワが入るので、歌い手がわかる。ツグミのさえずりの練習、つまり、ぐぜりである。冬の権化はこのとき、春告げ鳥に変わり、そして、夏の使者としてシベリアへ旅立つ。

その昔、大久保農耕地や秋が瀬では、冬季、いろいろなホオジロ類がいた（今でもいるかもしれないが）。ホオジロ、アオジ、カシラダカをはじめ、オオジュリン、コジュリン、ミヤマホオジロなど。ビギナーだった私は、何がなんだかわからなかったが、鳥の先輩が「まずホオジロの地鳴きを覚えなさい」と教えてくれた。ホオジロ類の地鳴きは、ほとんどがチッという一声だが、ホオジロはチッチとかチチチッという2、3声の連続音を出すので、わかりやすい。実際、ホオジロか否かという判断が出来るようになったら、他の鳥も何となくわかってくるようになった。と同時に、“チッチときたらホオジロ”というキャッチフレーズが、神経伝達経路に完全にインプットされてしまったらしい。

このインプットされたキャッチフレーズのために、思いがけない間違いをすることがある。ある日、雑木林の林縁でチッチという声を聞いた。何の疑いもなくホオジロだと思い、樹上の鳥影に目を向けると、何かおかしい。肥満体である。何だ、このホオジロは？と双眼鏡で見たら、シメだった。このように、時々シメとホオジロがわからなくなってしまう。両者の声は、音質が全く違う。どちらも字で



今日も快便！ ヒレンジャク（池内輝明）

表せばチチッとなるが、シメの声はホオジロよりも鋭く、はじけるような音で、むしろピチッといったほうが近い。声を聞いてすぐに、シメだとわかることもあるが、どうかすると混乱する。

これは、私の脳がシメの声をどう処理するかによるのではないか、と思っている。おかしな処理をせず、聞こえてきた声の音質そのもので判断すれば、間違うことはない。ところが何かの具合で、その声がチチッという文字情報に変換されることがあり、そうすると例のキャッチフレーズに従って、ほとんど反射的にホオジロという答えが出てしまうのかもしれない。要するに条件反射？ 何だか自分が、イヌか何かみたいなきがしてきたところで、ちょうど紙面が尽きてきた。

地鳴きの話の最後にひとこと、お願い。地鳴きは警戒の意味を持つことが多い。特に、立て続けに鳴いたり興奮気味だったりしたら、警戒であると思ってよい。そして多くの場合、警戒の対象は観察者自身である。こういうときは、姿を確認しようなどと深追いはせず、出来るだけ早くその場から離れてやってほしい。鳥のためだけでなく、私たちが末永く鳥を楽しむためにも。